

論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称	博 士 （ 教 育 学 ）	氏名	毛 炫 琇
学位授与の要件	学位規則第4条第1・2項該当		
<p>論 文 題 目</p> <p style="text-align: center;">中国人上級日本語学習者におけるリピーティングのメカニズム —作動記憶容量の観点から—</p>			
<p>論文審査担当者</p> <p style="text-align: center;">主 査 教 授 松 見 法 男 審査委員 教 授 永 田 良 太 審査委員 教 授 森 田 愛 子</p>			
<p>〔論文審査の要旨〕</p> <p>本論文は、中国語を母語とする上級の日本語学習者を対象に、作動記憶（working memory：以下、WM）の理論を枠組みとし、学習者がリピーティングを行う際の意味処理と音韻保持の様相を実験的に検討したものである。具体的には、物理的な時間軸に沿って、文のリピーティング過程と、学習者の WM 容量の意味処理と音韻保持への配分の仕方の違いについて検討した。</p> <p>論文の構成は、次の通りである。</p> <p>第1章では、第二言語学習法としてのリピーティングの変遷を記述し、リピーティングの有効性を実証した研究を概観した。次に、母語における文のリピーティングのメカニズムに関する研究を吟味し、Baddeley（2000）の WM モデルに基づいて文のリピーティング過程を論じた。さらに、第二言語における文のリピーティングのメカニズムに関する研究を概観し、先行研究の問題点を指摘した上で、本研究の研究課題を提示した。</p> <p>第2章では、研究課題に沿って行った4つの実験について述べた。</p> <p>実験1では、有意味語文を材料として用い、リピーティングの開始時点を操作して、学習者における文のリピーティングの過程について探索的に検討した。その結果、学習者における文のリピーティングは、音声の聴覚呈示終了時から口頭再生開始時までの間に時間が経過するほど文の意味処理及び音韻保持の成績が向上すること、WM 容量が重要な役割を果たし、WM 容量の大小によって意味処理と音韻保持の様相が異なることが示唆された。</p> <p>実験2から実験4までは、認知的負荷の高い無意味語文を材料として用い、学習者の WM 容量の個人差による処理資源の配分の仕方について検討した。その際、無意味語の位置を文頭と文中で操作し、無意味語の位置による違いも併せて検討した。実験2ではリピーティングの開始時点を操作し、実験3では意味処理を促す教示を用い、実験4では音声の聴覚呈示終了時から口頭再生開始時までの間に構音抑制課題を与えて、WM 容量の異なる学習者がそれぞれ無意味語文をリピーティングする時の意味処理と音韻保持の様相について調べた。その結果、次の3点が示唆された。(a) WM 容量の大きい学習者は、リピーティング課題遂行中に文の意味処理と音韻保持の双方に処理資源を配分して効率よく行うのに対し、WM 容量の小さい学習者は、意味処理と音韻保持のどちらか一方に処理資源を</p>			

配分することが多い。(b) 意味処理と音韻保持の双方の負荷が高い場合、学習者は音声の聴覚呈示時に意味処理を十分に行うことができない。ただし、それでも学習者は聴覚呈示終了後に意味処理を引き続き行わず、処理資源を音韻保持に配分する。(c) 学習者が新規単語や未知単語が入っている文をリピーティングする時は、新規単語や未知単語が文中のどの位置にあるかによって、音声の聴覚呈示終了時から口頭再生開始時までの間における意味処理と音韻保持の様相が異なる。以上の3点である。

第3章では、実験1から実験4までのまとめを行い、認知的負荷が異なる条件下での文のリピーティングにおける、学習者の特徴的な意味処理と音韻保持の様相及び、学習者のWM容量の個人差による違いについて総合考察を行った。そして、本研究の意義、日本語教育への示唆、今後の課題を順に述べた。

本論文は、以下の3点で高く評価できる。

1. これまで未解明であった日本語学習者における文のリピーティング過程について、WMの理論を枠組みとし、複数の実験を体系的に行い、その詳細を検討した点である。第二言語における文のリピーティングのメカニズムに関する研究は、リピーティングが認知的課題であることの指摘にとどまり、主に英語教育の分野で検討がなされてきた。本研究では、先行研究で対象とされなかった日本語学習者のリピーティング時の処理について、WMの観点を取り入れて検討した。本研究の遂行により、WMモデルに沿った学習者の特徴的な文のリピーティング過程が明らかとなり、第二言語学習法としての文のリピーティングのメカニズムの一端が解明できた。
2. 第二言語学習者の認知能力であるWM容量の個人差による違いを明らかにした点である。本研究では、WM容量の大きい学習者と小さい学習者がそれぞれ文をリピーティングする時、どのように意味処理と音韻保持を行うのかについて検討した。本研究の結果から、WM容量の大小によって文のリピーティング時における意味処理と音韻保持の様相が異なることが示唆された。そして、日本語教育の現場において、学習者のWM容量の個人差に応じた効果的なリピーティング練習法を提案することができた。
3. 独創的な研究方法を用いた点である。本研究では、学習者のWM容量の大小による処理資源の配分の仕方について調べるため、無意味語を名詞として文の中に挿入した。無意味語の挿入は、文の意味処理及び音韻保持に大きな支障をきたさなかったが、双方に認知的負荷をかけることになった。本研究の結果により、文の中で無意味語の位置を操作してWMの働きを明らかにするという実験計画の妥当性を示すことができた。言語処理における心的負荷という観点から、第二言語の実証的研究の新たな可能性を見出した。

以上、審査の結果、本論文の著者は博士（教育学）の学位を授与される十分な資格があるものと認められる。

令和4年2月14日